

Title	お伽草子 『緑弥生』 : 新出作品解説
Author(s)	柴田, 芳成
Citation	京都大学國文學論叢 (1999), 3: 1-12
Issue Date	1999-11-30
URL	https://doi.org/10.14989/137279
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

お伽草子『緑弥生』

——新出作品解説——

柴田芳成

はじめに

今秋、京都大学附属図書館創立百周年記念公開展示会として「お伽草子―物語の玉手箱―」が企画され、本学全体の所蔵調査をするなかで本書『緑弥生』の出現をみた。

本稿はその内容に関する検討である。なお、本作品は現存する室町時代物語についてもっとも網羅的に調査された松本隆信氏の「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」(『御伽草子の世界』所収)には登録されておらず、『国書総目録』でも「緑弥生^{たかひ}」一冊写「京大」と記載されるにすぎない。

本文は適宜掲出するとして、まず梗概を示す。未紹介の作品なので少々詳しく述べることにしたい。

嵯峨天皇の時代、二条堀川の左大将には少将ただみね・弥生姫の二子、第三条の大納言には緑姫がいた。緑姫は九才にして母を、次いで父をなくす。従姉の弥生姫は

常に三条を訪れ緑姫を慰めた。弥生姫十七才、緑姫十六才の春、両姫が遊ぶところに桜の一枝を手にした十九才になった少将が訪れ、緑姫を見初める。再び三条の邸に忍び込んだ少将は姫の乳母小侍従に文を託す。姫は拒否するが、少将は小侍従の手引きを得て思いを遂げた。夏、弥生姫が女御の宣旨を受けて弘徽殿に入内。少将は緑姫の心細さを思いやるものの、父の命に従い大炊殿の姫君を妻に迎える。少将は緑姫への思いが強く、大炊殿姫をうち捨てておく。父左大将はその理由を知り、少将が内裏の遊びで留守の間に緑姫を三条の邸から追い出す。緑姫は小侍従のいとこ尼君がいる大原に退く。三条邸を訪れ事情を知った少将は、緑姫は東へ下ったと偽り大炊殿姫の許へ行くことを勧める父の言葉も聞かず、神仏に祈請、諸方を歩き回る。大原の緑姫は出家を願うが周囲が許さない。初冬、女院に仕える尼君の妹侍従内侍が大原を訪れ、姫の美しさに驚き、女院に仕えることを勧める。女院も承諾して出仕することとなり縁上と呼ばれる。ある雪の日、女院の御所に御幸した御門が姫を見初める。

御門は生前の大納言が女御にと約していた姫と知って文を遣わすが、緑上は返事をしない。それをも優に感じた御門は再び文を送る。周囲の説得により緑上は返歌し、以後御幸があるが、弘徽殿に知られることを恥じた。弘徽殿で御門の来訪ないことを不審がる頃、緑上は麗景殿に迎えられる。御門は麗景殿を寵愛、事情を知った弘徽殿は落胆し、またそれを聞いた左大将らは自らの緑姫への仕打ちを後悔する。一方ひたすらに姫を恋う少将は噂を聞き、妹弘徽殿を訪ね真相をただす。少将は、思いを託した歌を小侍従に渡すが返事を得られず、姫との再度の逢瀬の望み叶うことなく二十才にして思い死ぬ。御門、麗景殿は少将の死を悲しむ。大炊殿姫は送り還され、弘徽殿は退下。麗景殿は皇子二人姫一人を生み、后の上と呼ばれる。皇子は十二才で即位して文徳天皇となり、姫は十二才で伊勢斎宮、二宮は十才で東宮に立つ。御門、后は院号を受け栄えた。

右の梗概から明らかなように、「素性は賤しくないが父母に死別して恵まれない境遇にある姫君が貴公子に見出され、一度は幸福な結婚生活に入るものの、舅が夫に対して権門の息女との政略的結婚を強いたために、その犠牲となつて家を逐われるというプロット」^(三)をもち、いわゆる「しのびね」型に連なる作品である。

広く「お伽草子」と呼ばれる作品は、市古貞次氏が分

類整理され、そこで公家物とされた作品群については、松本隆信氏に詳細な研究がある。^(三)両氏の提示された作品との相違点を明らかにするため後に表を掲げた。表は松本氏の論文中に示されたものにならつて物語をおおまかに三段に分ち、さらに冒頭の時代設定、末尾の教訓の有無を挙げた。

一 幼少期

緑姫の境遇に沿つてみていくことにするが、まず冒頭部、姫君の置かれた環境を示す。ただし、本文掲出に際しては読解の便を考え、私に漢字をあて句読点を付した。

(仮名遣いは原文のまま)

嵯峨の天王の御時、二条堀川に左大将と聞こえてと
きめき給ふ事限りなし。御子二人持ち給ふ。御嫡子
をば少将ただみねとぞ申ける。御かたちよりはじめて
姿有様並びなく、容顔人に優れ、よろずありがた
き程にぞおはしける。去程に御門の御気色またとも
なくおほしめす。その御妹の折しも弥生半ばに生ま
れさせ給ひければ、御名弥生姫君とぞ申ける。いつ
きかしづき給ふ事限りなし。此左大将の御弟播磨の
大納言と申て、三条なる所に御所を建ててみか^(一)と住
み給ふ。その北の御方は古き御門の御末に葵の宮と

申せしを、いかなる前世の御契りにや、此大納言殿見初め参らせ給ひてより、人目も包まず契り給ひて過ぎ給ふ程に、たぐひなき程の姫君を儲け給ひて喜びかしづき給ふ事限りなし。父大納言、世の中に久しき物は松なり、松によそえて此姫君をば緑の姫君とぞ申ける。乳母介錯数知らず、かけ参らせていつきかしづきおわします。此姫君の御かたち日にそへて美しく、年月重なるままに光差し添ふ心地して辺りも輝く計なり。父母、この姫君の大人しくなるまに、いかなる昔の楊貴妃李夫人も此世に生まれ給ひたると疑ふ程なり。后に立てんと喜びかしづき給ふ程に……（一オゝ二オ）

これから展開する物語を前に、母は天皇家に通じる血筋であること、姫の容姿が優れていたことが語られる。

緑姫は九才にして母を失い、次いで父大納言をも失う。（直前の引用箇所続く）

姫君九に成給ふ如月末つ方に、母宮例ならず悩み患い給ひて、大納言大きに驚き給ひ、色々様々の祈禱何ならず、多くの人々集まりて惜しめども悲しめども甲斐もなし。晴明が符、普婆が薬もかなわず、御年二十七と申に露の御命消え果てて昔語りと成給ふ。大納言は姫君の乳母に添ひ付きて、ただ浅茅が原の露ともろとも消えなまし、同じ道に連れてお

わしませ、と声もおしまず嘆き給ふ事限りなし。女房たち、端の者、あやしの賤の女にいたるまで涙せきあえず。もとより定めなき老少不定の住みかなれば、今にはじめぬ習ひにて露の住みかに送らんとしける時、姫君、母宮の空しき御手に抱き付き、涙の隙よりかくなん、

たらちめの母ちり行に何とてかこの身を風の誘はざるらん

大納言聞き給ひて限りなく哀れにおほしめし、かやうに詠じ給ふ、

あだなれや先立つ人は桜花散り行風を何と恨みむただ同じ草の葉の露とも成なましとて、嘆き悲しみ給へば、薪ともに積み込め鳥部の山の薄煙、先立つ人のあらし世に別れの後に長らへて見るに涙も止まらず。七々の御弔ひ四十九月（百廿）にあたる日わ阿弥陀の三尊迎へまいらせ、仏を作り経を誦み、花香を手向け参らせ、五障（しやう）三従の雲晴れて必ず西方浄土へ導き給へ、と祈りけり。去程に大納言殿は年月隔たり行けども北の御方の御別れの事をおほしめしていまだ忘れ給わず。別れの涙、名残の袖にぞ止まりける。思ひやられてあわれなり。かかる御思ひにや、大納言殿さへはかなく成給ひぬ。姫君、母宮に遅れさせ給ひて、いまだ御袂の白露払いかねたる折からに父

大納言さへ失せ給へば、玉手箱のふた親もなき懸子ばかりの心地していとど思ひは深草の露より繁き泪かな、いまは此世に長らへて何かせんと泣き給へば……(二才〜四才)

とあり、

緑の姫君は、世の人の父母よとの給ふにつけてもいよいよ父母の恋しき事やる方もなくて、必ず日に一度づつ父母の御墓へ参り給ひて念仏を申、経を読み、夜を觀じて無常恨み給ひて、などや今まで止め置き、かかる憂き目を見せさせ給ふぞや、とくどく迎へ取り給へとて……(四ウ)

などと父母を慕い、その供養をする姿が描かれる。

ところで、表に挙げた他作品では不遇の姫君の現在をどう描いているか。

女主人公の姫が幼くして父母をなくしたことを示す箇所をみていく。『しぐれ』では清水での通夜に乳母がもらす「あはれ、父母のおはしまさば」との言葉や、侍従が中納言に姫の素性を明かす場面に語られる。また『桜の中將』でも中將の使い播磨守が得た「大宮の大納言とやらんいふ人の姫君一人住み給ふ」との情報、姫君の邸に仕える介の局の語りに「いとけなきよりも父母に遅れさせ給ひ、幽かなる体に住み給ふ」とあって、物語を追ううちに読者にも身寄りない姫であることは知らされる。

ただ、これらは登場人物間のやりとりの中で表れてくる。

『しぐれ』『桜の中將』ともに男主人公の働きかけがあつて明かされるわけである。ということは、その語りを引き出した男主人公の側がこれらの物語を導いているといえるのではないだろうか。『緑弥生』を含めてどの作品にも物語の展開上重要な役をつとめる男女がいる。その男、女のどちらがより第一の中心であるのか、それは物語のはじめにうかがえる。それぞれの冒頭部は次の通り。

『しぐれ』…左大臣の二子の紹介、次いで清水に参籠する妹を兄中將が見舞い、姫との出会いへと展開する。姫に両親のないことは記されない。

『若草物語』…按察大納言に少將と朝日の前の二子ある

ことが語られた続き、

さてまた、大納言殿の御台所の御兄ごを先の関白殿と申ける。是にも姫宮一人おはします。玉の様な御かたちにてましませば、御行く末も頼もしく、父母の御寵愛は限りなし。げにはかなき世のならひにて、無常の風に誘はれて、関白隠れさせ給ひける。其御思ひのあまりにや、母上も程なくはかなくなり給ひぬ。(本文は私に漢字、句読点

を付した。以下の引用の場合も同じ)

簡略ながら、一読明らかかなように『緑弥生』ともつとも近似した始まりである。

『桜の中將』：男主人公の紹介に続いて、彼が姫を見初める場面となる。姫に両親のないことは記されない。(註)

『志賀物語』：都に姫の噂が高く、彼女に憧れる多くの公卿の一人として少將が登場する。本話では、親である中納言が亡くなるのは姫君が十九才、すでに男主人公との交際が始まって三年ばかり経過した頃であり、前三作品とは設定が異なる。

右の比較から『しぐれ』『桜の中將』は男主人公を中心におく系列、『若草物語』『志賀物語』は女主人公を中心に置く系列、とひとまずは考えることができよう。ただそうすると『若草物語』は表にも示した通り、途中で女主人公が死ぬにもかかわらずその後も物語が続くという破綻をきたすように、これを固定的に考えるというつもりはない。男女のいずれかを中心に見ること、それが物語展開にどう関わるのかという問題については、今は問わない。

本作品では他にはみられないほどに姫の誕生、父母との死別の描写に筆を費やす。北の方に先立たれた父子の

悲しみを和歌を交えて描き、亡き父母を慕う姫の日常を描く。以後の展開でも仏道を願い続ける姫が中心に据えられ、その姫をひたすらに追う少將の姿は決して強くは立ち上がってこない。本作品は冒頭から波乱を経ての結末まで一貫して緑姫の物語を指向する。

二 少將との逢瀬、別れ

父母を失った後も緑姫は父大納言の三条の邸に乳母小侍従らとともに住んでいた。従姉にあたる弥生姫は折にふれて訪れ、緑姫を慰めたという。そうしたある春の一日少將もやってきて二人は出会う。それから和歌の贈答、乳母の助けもあって二人が結ばれるのは他作品でも同じ。だが、緑姫は少女の心のままに亡き父母を慕うばかりで少將への愛は育まれない。少將の妹弥生姫の入内が決まった後の場面。

去程に姫君は、弥生姫君のおはします程こそ慰むかたもありつるに、月も雲居のよそにはや隔たりしその後はいとどつれづれ限りなし、涙計にて明かし暮らし給ふ。少將これをご覧じて姫君にのたまふやう、何事をおぼしめして常に思ひ乱れて沈み入り給ふぞ、いか成恋をせさせ給ふぞ、何事にてもただみねに語り合わせ給へ、とのたまへば、はづかしくおほ

しめして、恋する事はなけれどもいかなる罪の報ひにや、親も無き身なし子となりてかやうにあさましからんと今更我が身ながらうらめしくて、とのたまへば……（一一オウ同ウ）

姫君の心細さを知った少将は、妻として邸に迎えることが許されない苦しい心境を歌に託す。

少将かくなん、

君と我乱れあわばや信濃なるほやの薄しどろも
どろに

姫君御返事とせめられて、

乱れても甲斐なき物を信濃なるほや野の薄ほにい
だすとも

かやうに聞こゆれば、なをも同じ心におぼさぬよ、
と心もくうらみ給ふ。（一二オウ）

少将は緑姫の心がいまだに父母に向かい、自分には向けられないことを知った。それはまた、少将が父左大将の命で大炊殿の姫君を妻とすることを知った場面にも表れる。他作品では、女主人公は悲しみつつも男主人公を氣遣い、恨みを抱かないことを告げる描写となるのに対して、緑姫は少将への言葉はなく、ただ我が身の有り様を嘆くばかりなのである。これには緑姫が父大納言の残した邸に住んでおり、他作品の姫たちのように何よりも身の置場として男主人公を頼る必要がないことも一因と

なっている。

この男主人公と権門家の姫の結婚の場面、他作品のように両家の父同士による約束が描かれず、さても左大将殿には嗟嘆の大炊殿姫君迎えさせ給ふべきにためてたき事限りなし」（一二オウ同ウ）と唐突に物語に現れる。

緑姫への思いがますます募る少将は、大炊殿の姫君を新たに妻として迎えたとはいえ、文さえ送ろうとはしない。事情を知った少将の両親は激怒する。

母上のたまふやう、真やらん、人づてに聞候へば、

三条の緑の姫君の方へ通ひ給ふと受け給候、此大炊殿姫君を疎み給ふもこの姫君ゆへと聞くなり、いか
にもして空しく送りまいらせでは、人目しちと申。

父母の心の内方々大事なりべし、いかがとの給へば、左大将聞こしめし、あさましや、世にありありしき御方をば疎みて二親もなき身なし子の果報拙き者を何の頼もしさに思ひつき、かやうの振舞いするやらん、我は姪なれども、かやうのいまわしき者は見たくもなし、いかなる所へも追ひ出ばや、とて少将の隙を窺ひけり。（一四オウ同ウ）

少将の両親は大炊殿の姫君との結婚による権勢の獲得に躍起になっており、身内人として緑姫の境遇を思いやる情愛はない。この点『若草物語』で姫君の伯母にあたる北の方が身寄りない姫君を引き取り、夫大納言の仕打

ちを諷めるのとは対照的である。(妹が慰めるのは弥生姫の態度と同じ)。男主人公の母が姫君に対して同情的であるのは『桜の中将』にも当てはまる。松本氏は、母・姉妹が特に役を演じない『しぐれ』や登場すらしない『志賀物語』との比較から「このように、母や姉妹を姫に対する同情者として振舞わせるのは、敵役である父親の非道ぶりを強調する意味があると考えられ、その点では「若草」「桜の中将」は進んだ型であると言えよう」⁵⁾とされた。この流でいくと、両親揃って姫君を追いやりうとする本作品はその敵性を究極にまで高め、姫の孤立を徹底させたわけである。

父左大将は少将と大炊殿姫君を結ぶために謀をめぐらす。緑姫には少将の言葉と偽って退去を求め、少将には緑姫は東へ下ったと語るもの(少将は高倉局から真相を聞く)である。この仕打ちが物語の末に響いてくる。

追い出し方については、中将が姫を忘れるように仕向ける呪咀(『しぐれ』)、大仏詣や物詣にという嘘の誘い出し(『若草物語』『桜の中将』)と比べて、本作品が少将が内裏の遊びのために帰らない折を見計らって、直接姫君の邸まで出向いて退去を迫るとするのはあまりに直線的といえようか。だがここで他にみられるような姫が不審を抱く時日を設けず、一夜の出来事とすることで、引き

裂かれることの突発性は確実に増している。

そしてここにもう一つ大きな問題がある。『しぐれ』を除く他作品では、男主人公との出会いから別れに至るまでに二人の間に子が生まれて(あるいは妊娠して)おり、引き裂かれる場面がより悲劇的になるのだが、その点緑姫の退去は邸を逐われる恨みを抱くものの、我が子と別れねばならないほどの悲痛さはなく、乳母小侍従の進言に従って速やかに行なわれたのであった。

三 入内

『若草物語』『桜の中将』『志賀物語』では追い出され、あるいは自ら退去した先で姫は没する。(『若草物語』『桜の中将』には、最後の場面を姫が男主人公と添い遂げる筋に改変した異本があるが今は措く)本作品ではこの退去がのちの后位へのきっかけとなるのであるが、隠棲先の大原で女院に見出され、そこから女院に出仕、御門と出会うという設定は『しぐれ』(退去先が内裏に出仕する侍従の伯母)に比べて一段階多くを経ることになる。図示すると次のようになる。

緑弥生・退去↓大原・侍従内侍に見出される↓女院
に出仕・御門に見出される↓入内

しぐれ・退去↓侍従の伯母の許・内裏仏名会・御門

に見出される↓入内

また女院を訪ね、緑姫の存在を知った御門は故大納言とのかつての約束を思い出す。

御門、女院の御所へ御幸ならせ給ひて御物語あり。女院の傍らを御覧すれば年の程十四五ばかりなる女房、菊襲の裳一重に桜の匂の桂、薄紅の袴着て面はゆげなる風情にて御そばにおわします。御門つくづくと御覧づれば、はらはらとかかりたりマヤ鬢の髪のはづれより青黛の眉墨ほのかにしてほげほけとして目のあたり何にたとゑん方もなし。春の花の露を含み秋の月の山の端を出るよりもなを隈もなく美しく天人の影向もかくやおぼしめし、女院に仰せけるは、いかなる人にて渡らせ給ふぞ、と仰せあれば、女院仰せけるは、さればあわれなる事にて候、一年失せし播磨の大納言が姫也、母宮も大納言もうち統き失せにしかば、やうやう育みし乳母にも別れていと幽かにて侍りしが、尼に成て父母の菩提をもとわんとて忍びておわせしをマヤ水から聞きて迎へ取りうれしくて召し使ふなり、と細々と語らせ給ふ。御門聞こし召され、大納言がありし時、女御に参らせんと申せしは此姫が事也、大納言が失せてのち忘れて過し口惜しさよ、弘徽殿の女御のいとこ也、あわれ

うれしき契り成、とてやがて還御なり……(二八才)
〜(二九才)

『しぐれ』でも姫がかつて女御の宣旨を受けていたことを、退去先の丹後の内侍が帝に姫を紹介する場面があり、入内したものの泣き沈む姫に、帝が次のように語りかける。

帝、やうくマヤに慰めかねて、あな心苦しや、さのみなむつかりそかし。八の袴のついでに、きんざねも我に得させんと契りしが、親他界したれば今までマヤちし侍へり。

そうして御門に迎えられた後、先に入内していた男主人公の妹を越す程の寵愛を受け、后位につき、皇子・姫に恵まれ栄えるのは『しぐれ』と同じ。だが本作品では、緑姫は従姉弥生姫がすでに弘徽殿に入内していることを知っており、そのため自分が麗景殿に迎えられることに遑巡し、さらに日々その御寵が深まることを恥じる態度を示すという点、異なつた趣向をこらしている。

一方、男主人公のその後。本作品では少将は思い死にに死んでしまう。他作品では、死別であれ入内であれ、姫に自分の思いが届かないことを知つた男主人公は出家を選ぶ。この点は本作品独自の展開であるが、あるいは『むぐら』『あきぎり』などの、失意の男主人公の死・女

主人公の栄華を描いた物語によつたものであろうか。

また、少将の死を知つた御門はそれが麗景殿（緑姫）が原因とは気付かない。この無邪気さに比べると、中將の出家とそれを知つた姫の流す涙から、二人の交渉を感じ取つたものの知らぬふりをする『しくれ』の帝の態度の方が趣深い。

四 冒頭・末尾

はじめに示したように本作品では、物語の時代を「嵯峨の天王の御時」とする。物語作品に登場する嵯峨天皇（院）は、前代の王朝物語のなか『いはでしのぶ』『我が身にたどる姫君』にみられ、『校本風葉和歌集』の散逸物語索引によつても、冷泉、一条、朱雀といった帝名に次ぐ数を検しうる。また物語の様相は異なるが『はもち中納言』『村松物語』といったお伽草子や幸若舞曲『百合若大臣』でも物語の舞台を嵯峨天皇の御世に設定しているように、物語中の治世者として決して珍しいわけではない。のちに入内した緑姫の腹になる皇子が讓位を受け「御門文徳天王と申は此御子なり」（三八才）と語られるが、念のため歴史に照らせば文徳天皇は嵯峨天皇の子ではなく孫であり、皇位継承も三代後である。⁽²⁾

桓武50 — 平城51

嵯峨52 — 仁明54 — 文徳55

淳和53

それに対して他の諸作品では「中ごろ」「中むかし」と時の治世者を語らない物語世界への導入である。この差異をどう評価したものか、いまその準備はない。ただ、中世の『狭衣物語』（室町時代物語大成六）には冒頭部を「中比」「むかし」とするもののほか、「北野の天神の御時」「昔桓武天皇の御時」「昔欽明天皇の御時」とする諸本が知られ、一作品においても時代設定に二通りの処理をもつ作品のあることを挙げておく。

本作品は「されば人は情け深くあるべし」（三八才）の文をもつて結ばれる。物語を振り返つてみると、この言は左大将の計略が結果的に一族の悲劇を招いたところから導かれるものであろう。『若草物語』の末尾が欲深・女の短気の戒めで閉じられるのに同じい。これら物語から何らかの教訓を導こうとする姿勢は、『しくれ』『校の中將』に付された仏の世界への親近をも含めて、お伽草子によくみられるところである。緑姫はなき父母に供養を尽くし、后位にまで上つたわけで、反省される点は見当らないが、左大将はその権勢欲が皆に悲惨を被らせた。戒められるべきは左大将の行為であつた。

五

以上、おおむね物語展開に沿って本作品を通覧したわけであるが、緑姫と少将との間に弥生姫をおく前半は『若草物語』に近く、後半の姫の入内、栄華、および絶えず仏道に思いをはせる態度は『しぐれ』に通じるものがある。したがって現段階での検討から本作品のあり方をまとめると、それらの他作品に学びつつあった物語の一編、となるかと思う。

今回の考察では他作品との比較を中心とした、部分に限った掲出であり、積み残した問題も多い。

たとえば、和歌の問題。本作品中、三十首の和歌が詠まれているが『風葉和歌集』所収歌と合致するものはない。その点では先行散逸作品との関連は確認しえないのだが、一方で次のような例がみられる。

緑姫との仲を引き裂かれた少将が詠んだ歌。

憂きはただ月に村雲花に風思ふに別れ思わぬに添ふ
(二七才)

この一首は、その歌が詠まれた状況はともあれ、『薄雪物語』(日本古典全書『仮名草子集』上)の中で薄雪が詠んだ、

世の中は月にむら花に風おもふに別れおもはぬに添

ふ
と酷似する。

また、物語の冒頭近く緑姫が母との死別を悲しむ場面、
姫君、母宮の空しき御手に抱き付き、涙の隙よりか
くなん、

たらちめの母ちり行に何とてかこの身を風の誘は
ざるらん(二ウ)

の描写は、『伏屋の物がたり』(室町物語大成十一)での
姫と母との死別場面、

姫君、空しき母御前の御首に抱き付き給ふが、しば
しありてかくなん、

たらちめの母秋風に散りて行く花もろともに我も
止まらじ

と通じるものがある。歌句にとどまらず、この『伏屋の物がたり』の冒頭部(両親が姫を愛育する様、母の病、死、そして供養の場面)は本作品に非常に近い描写をもつ。

ここに挙げた歌は二首にすぎず、ともにある程度類型的な表現に属するであろう。だが同時に、右の例は本作品中での和歌を考える場合、場面ごとのそれぞれの歌の機能、評価とともに、お伽草子およびその周辺に位置する作品との交渉を考える必要があることを示している。

さらに設定される問題として、本作品独自の人物造形

(他作品にまして厳しい環境に置かれた緑姫の唯一の協力者である乳母小侍従の働きなど)がどうあるのか、等々が考えられる。

作品自体の読みを深めることを目指しつつ、今後の課題としたい。(七)

参考文献

- 市古貞次『中世小説の研究』(第8刷・平成三年、初刷昭和三〇年)
- 松本隆信「擬古物語系統の室町時代物語―「しぐれ」「若草」「桜の中將」「志賀物語」外―」(『斯道文庫論集』四、昭和四〇年三月)

〈注〉

(一) 本誌規定に従い、翻刻本文の掲載は割愛したことをお断りしておきます。本文(影印・翻刻)等は臨川書店から京都大学国語国文資料叢書の一冊として刊行される予定。

(二) 松本隆信、前掲参考文献。

(三) 市古貞次・松本隆信、前掲参考文献。

(四) 『小伏見物語』(『桜の中將』の異本)は

しかるに、うき世の中の理迷れ難くして、程なく父母に遅れ給へば、花の姿もいたづらに春風にしほれ、月の顔ばせもさながら秋の雲に隠れ、世の交ろひも物憂

くおぼしめし、自づから訪ひ来る人もまれにして、あるかなきかの御住まゐにてぞ、明かし暮らし給ける(室町時代物語大成五)

と『桜の中將』とは逆に女主人公の境遇から始まる。『緑弥生』以外では父母を失くした後の逼塞した状況も含めて最も詳しい描写をもつが、『緑弥生』には及ばない。

(五) 松本隆信、前掲参考文献。

(六) 蛇足ながら加えると、仁明の母橘嘉智子(清友の娘)、文徳の母藤原順子(冬嗣の娘)ともに本作品に描かれる緑姫の境遇とは異なる。

(七) 前述の刊行予定の本の解説で、本作品の語句・表現について少しくふれた。本稿とあわせて参照していただければ幸いです。

本稿中、「お伽草子」と「室町時代物語」の両方の語を併用したが、基本的には同義と考えている。

末筆ながら、「お伽草子」展の開催にご尽力下さった附属図書館、文学部図書室の職員の方々に感謝申し上げます。

(しばた よしなり・博士後期課程)

	緑 弥生	し ぐ れ	若 草 物 語	桜 の 中 将	志 賀 物 語
冒 頭	嵯峨の天王の御時	×	中むかしの事なるに	中比	なかがろ
男主人公	左大将の息少将ただみね	左大臣の息中将	按察大納言の息少将	中納言の息中将	大納言の息少将
女主人公	左大将の弟大納言の緑姫。幼くして父母を失う。	左衛門督中納言の姫。幼くして両親を失う。	大納言の妻の兄前関白の姫。幼くして両親を失う。	大納言の姫。幼くして両親を失う。	中納言の姫。少将と結ばれた後父没す。母は不明。
出会い	緑姫と弥生姫と遊ぶ所に少将が訪れ見初め、乳母の手引きで契りを結ぶ。姫は両親を慕う気持ち強く少将の思いは届きかねる。	中将清水参籠の折、時雨に姫に傘を貸し、さらに別当僧に奪われようとしたところを助け、自邸にまで連れ帰り、契りを結ぶ。	姫は大納言の北の方に養育される。少将、幼くより姫に心を懸ける。妹の仲介により深い仲となり、女子を備ける。	中将は節会の際に姫を見初める。両家の局の計らいで姫は中将の家に連れ出され契りを結び、若君を備ける。	姫の噂都に高く、憧れた少将は乳母を通じて文を交わし、のち契りを結ぶ。父中納言も了承。
別 れ	少将、大炊殿の姫と結婚。少将が内裏の遊びで留守の折、姫は三条の邸から追い出され、乳母のついで大原に退く。	中将、大将の姫との結婚を姫に打ち明け、ともに悲しむ。中将は呪詛にあい、姫のことを忘れる。姫は自ら乳母の伯母方に退く。	少将、左近宰相の姫との結婚を姫に打ち明ける。少将を宰相方に止め置かせ、姫を大仏詣と称して宇治へ追出す。	中将、徳大寺殿の姫と結婚。若君を中納言方に引取、中将の留守に物詣と称して姫を難波に追い出す。	少将、ひこの大炊殿の姫との結婚を懐妊した姫に話す。姫は乳母に従って近江の志賀に退く。
行く末	姫は女院に出仕し御門に見出され麗景殿に入内。弘徽殿(弥生姫)は愛を失い退下。少将は思い死に、左大将は後悔。のち麗景殿は皇子二人姫一人を備け、栄えた。	姫は内裏仏名会で帝に見初められ、承香殿に入内し中将の妹麗景殿以上の寵愛を受け、三皇子二姫を備けた。正氣に戻った中将は横川にて出家。	姫は宇治川に投身。長谷に参詣し靈夢を受けた少将は大仏にて出家、吉野に入って後往生を遂げる。大納言夫婦も出家。姫の娘は摂政の孫侍従に迎えられる。	事情を知った中将は天王寺に参籠し靈夢を受け、難波に向かうが姫は没しており、その菩提を弔い、後往生。中納言夫婦も出家。都の若君は出世し栄える。	姫は男子を出産して死ぬ。少将は志賀に赴き、若君と対面し出家、のち往生を遂げる。都に上った若君は昇進し、父母の供養をしていよいよ栄えた。
末 尾	されば人は情け深くあるべし	弥々清水の観音を信ずべし	* 後掲	×	此理を：(仏道の勧め)：

*若草物語末尾・是につけても、世の中の欲に限りなきは必ず家を失ふ也。又女のあまり短気なるも我身を失ひ、人を必ず損なふものなり。(以下略)
 表作成にあたっては、いづれも至町時代物語大成所収本文によった。大成番号、本文系統は次の通り。『しぐれ』は刊本(182・B2系統)、『若草物語』は刊本(416・A2系統)、『桜の中将』は寛文刊本(168・B系統)、『志賀物語』は奈良絵本(182・系統なし)。